

## 【夏の地域医療講演会】

# 地域が守る医療

～兵庫県丹波地域の住民の取り組み～

講師：丹波新聞社 編集部記者 足立智和 さん



講師：足立 智和 さん

今回の講師には、丹波新聞社編集部記者の 足立 智和 さんをお招きしました。

足立さんは、平成18年（2006年）から地元の基幹病院・兵庫県立柏原（かいばら）病院の医師不足問題の取材を続けておられます。住民が地域医療を守る1つのモデルとされ、全国的に注目を集める「県立柏原病院の小児科を守る会（以下「守る会）」の設立に携わり、住民運動に刺激された開業医、薬剤師、歯科医師、市民らで作る「丹波医療再生ネットワーク」の中心メンバーとして活動されています。

※ 野田首相も、柏原病院を今年4月に視察し、「守る会」のメンバーと懇談されたとのこと。

今回は、「地域が守る医療」と題して、「守る会」を始めとする兵庫県丹波地域の住民の取組について、ご講演していただきました。さらに、講演に先立って、県立十日町病院をご覧になったとのこと、その印象や十日町・津南地域の医療を守り育てていくために、住民一人ひとりにできること、求められることについてもお話をしていただきました。

### 日本の医療は、医療者の狂気のような頑張りで支えられている

- ◆ 日本は、これまで医療偽装を続けてきたと言ってよい。低賃金で、医師や看護師を働かせ、安価な医療を継続することで、世界一の医療を実現してきた。現場の人達へ重い負担を掛けつつ、おだてて持ち上げながら、これまでやってこられた。
- ◆ 医療従事者は、強い使命感を持っている。かつてなら、「この患者はお前が助けなきゃいけない。」「お前なら出来る。」と洗脳されてしまえば、24時間、36時間寝ないで働くこともできた。しかし現代は、医療に対する社会の風当たりが強くなり、（コンビニ受診や理不尽な中傷など）医療従事者の善意や使命感が踏みにじられてしまうことが増え、我に返ってしまった。

- ◆ 医師は給料が良く、美味しい仕事と思われがちだが、そうでもない。大企業のサラリーマンなら、ボーナスがあれば年休もあり、さらに退職金もある。医者も、短期間で異動するので、退職金はほとんど支給されないし、休暇も十分与えられていない。
- ◆ ヒラリー・クリントン氏（現アメリカ合衆国国務大臣、夫はビル・クリントン同国元大統領）は、介護保険の視察のために日本を訪れた時、「日本の病院医療は、医師をはじめ医療者の狂気のような頑張りで支えられている。」と発言している。日米比較をすると、医師と看護師の数がかなり違う。死にそうになりながらも、少ない人数で、日本の現場は頑張っている。

## 十日町市の現状

- ◆ この講演の前に、十日町病院に行ってきた。大きな病院で、頑張っておられるという印象を持った。現在（H23.8.20 当時）は大丈夫だと思うが、先の事は全くわからない。全国各地で医療崩壊の現場を見てきたが、病院は、一瞬にして崩壊してしまう。
- ◆ さらにいうと、救急外来の患者が多い。家族を含めて 16 人くらいいて、とても多いと感じた。土日祝日に外来患者がいるという病院は減りつつあって、一次救急診療所のような場所で、開業医の先生等が診て、重症だとわかれば病院へ運ぶという地域が増えている。
- ◆ いま日本中で潰れているのは、軽症の患者から重症の患者まで担っている十日町病院のような病院。兵庫県立柏原病院もそういう病院で、立て直しを図ってきた。医師の大量退職から現在に至るまでの過程について説明したい。

## 兵庫県立柏原病院について

### 兵庫県立柏原病院の概要

兵庫県には、6つの総合病院と6つの専門病院があります。そのほとんどが南部にありますが、柏原病院は、内陸部の丹波地域に位置しています（右地図参照）。

現在 17 診療科、許可病床数 303 床で、丹波地域の中核病院として位置づけられています。

※ 十日町病院は 14 診療科、許可病床数 275 床です。



兵庫県丹波地域の位置

- ◆ 平成 16 年に 44 人いた医師が、一時 18 人にまで減少した。あっという間に、医者が減って診察力が低下してしまった。
- ◆ 崩壊した最大の原因は、忙しすぎたこと。兵庫県では、自治体病院が救急受入を断ると、ものすごいクレームが来ていた。クレームに耐えられなくなり、弾けてしまった。
- ◆ 役割分担をきちんとして、基幹病院の負担を軽減せず、おんぶに抱っこしていると、医師は疲弊して、いつか退職してしまう。
- ◆ 内科医が減ることになったとき、18 人しかいない先生のうち 10 人くらいがそろって違う病院に移ろうかという話をしていた。内科は色々な診療科の中心なので、内科が弱体化して、他科との連携ができなくなってしまうと、病院として存立できない。
- ◆ 現在は、色々な仕掛け（後述）によって、医師 32~33 人まで息を吹き返した。中堅・年配の先生ばかりだったが、いまは免許を取って 1~5 年目の若い先生が 10 人くらいいて、若返りに成功した。

## 丹波医療圏における小児科の危機

- ◆ 2006年3月末、丹波医療圏には7人の小児科の先生がいたが（柏原病院に3人、500mくらい離れた赤十字病院に2人、20分くらいいった所の篠山病院に2人）、3人（それぞれ2人、0人、1人）にまで減ってしまった。
- ◆ 医師の過労死を報じる記事などがまとめられたスクラップブックに、「個人の力ではどうにもならない。死んでもすぐに忘れられる」と、柏原病院の医師の悲痛な叫びがつつられていて、衝撃を受けた。助ける側の人間が、こんなに苦しまなければいけないことに不条理を感じた。
- ◆ 取材中、夜12時くらいに医局で寝ている先生を確認し、次の日「昨夜も泊まったの？」と聞くと「帰ったよ。」と言う。「僕はだいたい5時とか5時半に1回家に帰る。帰ってシャワーを浴びて、朝ご飯を食べて病院に戻ってくる。そういう日は僕の中では泊まったことには入っていない。」  
こんな事を一人で19年間続けている医師がいる。こういう人たちのおかげで、現在の医療現場がまわっている。
- ◆ 前述の医師大量退職の影響で院長が辞めてしまい、小児科医が内部昇任したことで、小児科の実働医が一人になると、ついにその負担増に耐えられなくなった。影響は産婦人科に広がり、分娩の受付予約停止というところまでいった。
- ◆ 1年前から医療関係の記事を書いていたが、一向に問題が解決しない。いよいよ小児科も産婦人科もなくなってしまいそうだということで、自ら呼びかけてお母さん達に集まってもらい、座談会を行った（2007年4月）。
- ◆ 座談会には10人くらい集まってくれた。この事態を全く知らない人もいたが、自身の息子が柏原病院を受診した際のエピソードを紹介してくれた人がいて、当直明け36時間連続勤務など、医師の過酷な勤務を共有することができた。
- ◆ 柏原病院の小児科が無くなるのは困るけど、先生のあるな姿を見ていたら、「辞めないでほしい」とはとても言うことができないことを知り、「何とかしないといけない」ということになって、「県立柏原病院の小児科を守る会」が立ち上がった。

## 署名提出もがっくり～「県立柏原病院の小児科を守る会」序幕

- ◆ 医師が過酷な勤務に苦しんでいること、そして、自分たちの受診方法（コンビニ受診）が、医師を苦しめる一因になっていることを知ってもらうため、様々な広報活動をしていった。
- ◆ さらに、医師補充されなければ退職すると言われていたので、県知事に医師の招へいを求める署名を集めた。署名用紙は、「自分の都合ばかり優先して、コンビニ受診したりせず、医師を大切にする地域づくり、住民合意の形成に努めます」と、自らの責任についても明記した。
- ◆ 座談会の2ヶ月後（2007年6月）、5万5千通の署名を県庁に提出した。しかし、当時の兵庫県幹部が丹波地域の実情を理解していなかったため、話が噛み合わず、「無い袖は振れない、他の地域でも困っている」という一般論の回答しか得られなかった。

## 「県立柏原病院の小児科を守る会」第2幕

- ◆ その後、署名用紙にも書いた「コンビニ受診を控える」を実現する方向へ変化していった。〈コンビニ受診を控えよう〉〈かかりつけ医を持とう〉〈お医者さんに感謝の気持ちを伝えよう〉をスローガンにして、「子どもを守ろう お医者さんを守ろう」というピラを配布した。
- ◆ 当時、医師増を要望する運動は全国各地で見られたが、「守る会」の活動のように、医師のことを考え、受診行動に着眼したものは斬新だった。その活動は、全国の医療者から大歓迎され、活動を絶やしてはいけない、もっと大きくしたいと日本中の人々が応援をしてくれた。

- ◆ 医師増を要望しても受け入れられなかった経験があったので、本当に必要な人が必要な時に病院受診できるよう、軽症の場合は身近な開業医を利用することで、重症の子どもに病院受診を譲ろうと呼びかけた。そして、感謝の気持ちを伝えるため、ありがとうポストでメッセージを集めて、小児科へ寄せ書きを送ったりした。
- ◆ 「守る会」の活動が功を奏し、外来の診察表に他の医師の名前が増え始めたので、さらに啓発に力を入れるためステッカーを作った。また、受診方法を説明する「病院に行く、その前に・・・」という小冊子を作って、1部100円で販売した。これは4万部くらい売れ、北海道から沖縄まで色々な自治体が買い上げ、未就学児童のいる家庭などに配られている。
- ◆ ホームページの開設や、今週の休日当番の先生を通知するメールマガジンの配信も始めた。メールマガジンには、地域のお店が協賛してくれたのでクーポン券も付けた。当時の 舛添 要一 厚生労働大臣からも、「これこそが地域医療の崩壊を食い止める住民からの大きな運動だと尊敬します。一度私も見に行きたい」と連絡をいただき、後日視察に来られた。

### 現在の柏原病院

- ◆ コンビニ受診は圧倒的に減った。小児科時間外受診者100人のうち、8~9人入院するのが全国標準だが、柏原病院は20人(5人に1人)とかなり高率。柏原病院に直行せず、いったん開業医で受診するようになって、重症の患者が回ってくるようになったため。
- ◆ 小児科医は5人に増えた。かつては、夜中も患者が来ていたが、今はほとんど来ない。ゼロという日もけっこうあるくらいで、朝までぐっすり眠れるときもあると言われている。
- ◆ 医師が増え、患者も協力的なので、柏原病院の小児科は日本一働きやすいと言われている。柏原病院での勤務を望む人が多い。医師ばかり増えても困るので、ちょっと待って下さいというほどになっている。

### まとめ

- ◆ 「守る会」の活動は、医師と患者とのあいだに橋を架けるものだと考えている。医療には、私たち素人では理解できない部分もあり、医師と患者とのあいだにある溝を完全に埋めることはできない。しかし、相互信頼を深めていき、橋を架けることはできる。
- ◆ 医師も人間である。白衣を脱いだ医師と住民が、生身の人間として交流できる場があればいいと思う。病気になる前から、医療の事に興味を持って付き合っていれば、いざという時に、心に余裕を持つことができる。
- ◆ 都市部の大病院は患者が多いが、研修医も多く、経験を積むのに適しているとは限らない。魅力的な指導医なら、病院規模はあまり関係ない。若い人には、あなたを育てたいという熱意を伝えていくことが重要だと思う。
- ◆ 十日町地域の医師数は、非常に少ない。兵庫県なら無理だなと思うレベルなのに、とても努力をされていると思う。無くなってからでは遅いので、無くさないように何が出来るのかをそれぞれの立場で考えて、この地域の医療を守ってほしい。

---

◎ 丹波新聞 特集「医療」のページ：<http://tanba.jp/modules/features/index.php?storytopic=2>

◎ 県立柏原病院の小児科を守る会：<http://mamorusyounika.com/>